

陸水の環境で見られる植物



キガチキンバイ

セイコノヨシ
(セイタカヨシ)

イボタクサギ



サガリバナ

多年生草本。日当たりのよい湿地や沼などに生える。全体的に毛が生え、黄色い花がよく目立つ。

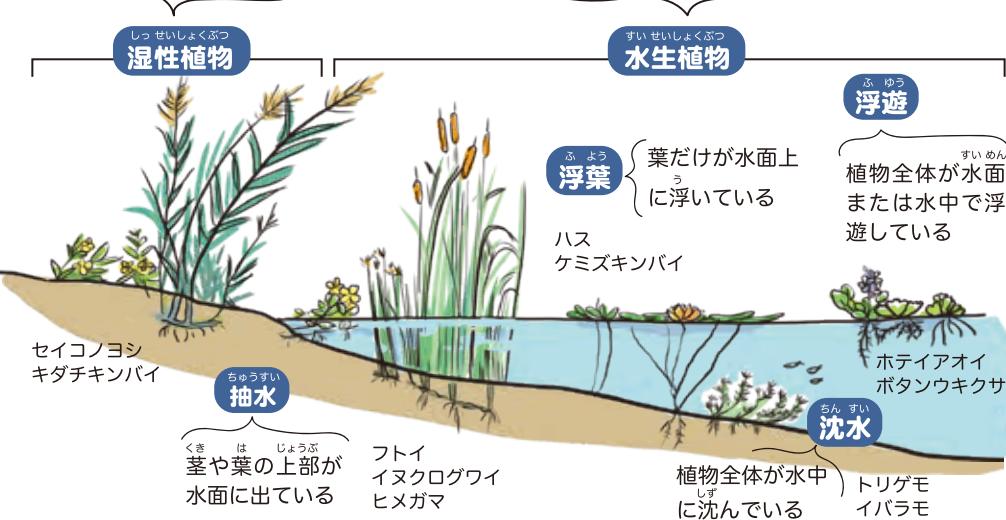
多年生草本。穂がサトウキビに似ている。葉が上向きで垂れ下がらない。

常緑半つる性低木。海岸や砂浜にも生える。葉をもむと臭い。茅葺のときに縄がわりにした。

常緑亞高木。花は夜に咲き、甘い香りを放つ。宮古島添道に唯一の自生群落地がある。

湿度の高い水辺や湿地に見られる植物。基本的に根を含む植物全体が陸上にある

体の一部またはその全体が水に浸かるような場所に見られる植物。一般には水草と呼ばれる



池間島いまむかし

1961年



2023年



港付近を堰き止め始めた頃のようす

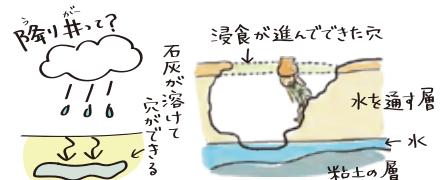
(上から見た入江) 1963年

宮古島市総合博物館所蔵

※国土地理院のウェブサイトの写真を加工して作成

淡水植物に会いにいこう！

珊瑚礁が盛り上がってできた宮古島の地層は、水を通してにくい粘土の層の上に、水を通してやすい石灰岩が重なってできています。地表に降った雨のほとんどは石灰岩の隙間にしみこみ、やがて海岸の崖下などから海に湧



き出ています。こうした湧水の周辺では、淡水を好む貴重な植物を見ることができます。湧水以外にも、降り井や洞泉など、島のあちこちに隠れている淡水の環境を探して、ぜひ淡水植物に会いに行ってみてください。

環境を変えてしまう外来種

生物は自然環境で密接に関係し合いながら生きており、各地域で独自の生態系を作り上げています。在来種は生態系をつくる要素のひとつで、他地域から外来種が入ってしまうと、環境を奪われて数が減ってしまったり、外来種との雑種が生まれたり、多様性が失われてしまったりと、もとの自然環境が大きく変わってしまうことがあります。

このように地域の自然環境に大きな影響を与え、生物の多様性を脅かすおそれのある外来種を「侵略的外来種」といいます。2005(平成17)年に施行された外来生物法では、生態系や人の命や身体、農水産業に被害

を及ぼすおそれのある海外からの外来種を「特定外来生物」と指定し、栽培や移動、野外へ放つことなどを規制しています。外来種は海外からだけとは限りません。国内でも他の地域から持ち込んだ動植物が環境に大きな影響を与えることがあるため、もとの生息・生育域以外に生物を移動させることができないよう注意が必要です。



特定外来生物

※特定外来生物はその場の移動を禁じられているため、見つけた場合は触らず、環境保全課自然環境係へ。

世界の侵略的外来種ワースト100!

ボタンウキクサ



浮遊性の常緑多年草。南アフリカ原産。繁茂すると水面を覆いつくし、湖や沼、河川の水温低下や、水質悪化の原因となる。

ツルヒヨドリ



つる性多年生草本。小さな白い花が咲く。日当たりの良い場所で勢いよく繁茂し、1日で10センチ以上伸びることもあり、英名で「Mile-a-minute(1分に1マイル)」ともいう。

要注意外来生物

外来生物法に基づく規制はないが、生態系に悪影響を及ぼすであろう種のことをいう。



ホティアオイ

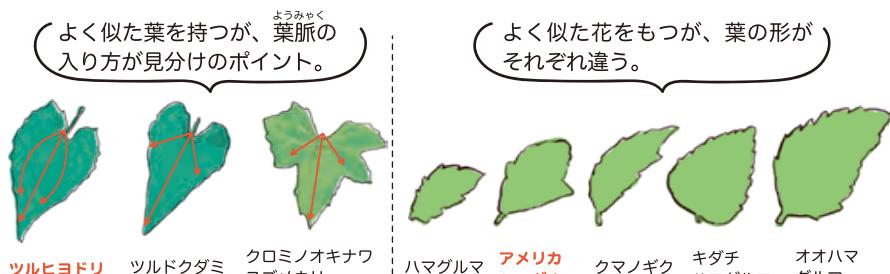
浮遊性多年生草本。繁茂して水面を覆いつくす。



アメリカハマグルマ

半つる性多年草。地面を覆いつくす、駆除が困難な厄介もの。

よく似た葉をもつ在来植物



大野山林散策コース(森林)

距離:約1.2km 所要時間:徒歩約20分



森林の環境

琉球石灰岩におおわれた宮古は、土の厚さや湿度、地形によって植生のちがいが見られます。土が厚く栄養が豊かで、湿度が高い低地やくぼ地には、タブノキ群落が発達し、土が薄く風が強くて乾燥している場所には、ヤブニッケイ群落などが発達しています。

宮古の森林率は約16%と少なく、その中でも大野山林は、宮古では最大規模の210ヘクタールの広さがあります。宮古で最も大きな水源である白川田水源の上にあり、水資源を育み守るための保安林として指定されています。また、希少植物の保全地としても貴重な存在となっており、散策コースも作られ、人々の森林体験の場としても利用されています。

一方で、造林のための下草刈りや遊歩道の増加により、開けた空間に外来種が入り込み、在来種への影響が心配される現状もあります。



大野山林散策コース(森林)

森林の環境で見られる植物

(ヌーマピンガスキ)



ヤブニッケイ

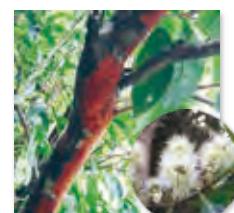
じょうりょくこう ぼく えだ は
常緑高木。枝葉は
薪にした。祭祀に
も使われ、葉を擦
り合わせて音を出
しながら踊る。

(コギー)



タブノキ

じょうりょくこう ぼく えだ は
常緑高木。赤い新
芽が目立つ。樹皮
から線香を作った
ので「香木」。汁を
漆喰にまぜて建材



バクチノキ

じょうりょくこう ぼく えだ は
常緑高木。樹皮がは
がれ黄赤色の木肌
が見えるのを、博打
に負けて丸裸にな
る様子に例えてつ



サキシマフヨウ

ていぼく りん えん
半常緑低木。林縁に
よく見られる。晩秋
に咲く一重の大き
い花が目立つ。落葉
樹高も大きい。

(ミズバーキー)



ショウベンノキ

じょうりょくこう ぼく
常緑小高木。枝を
切ると小便のよう
に樹液がしたたり
出るのが名の由
来。花は5ミリ程

(フボーキー)



リュウキュウガキ

じょうりょくこう ぼく
常緑小高木。果実は
有毒。魚を麻痺させ
て捕るのに使った。
枝は祭祀のときに
もした。

(トウビヤーラギー)



オキナワトベラ

じょうりょくこう ぼく
常緑低木。葉も花も
匂う。主にヤギの工
サとして使用。薪に
もした。

(アカツギー)



アカギ

じょうりょくこう ぼく
常緑高木。巨木にな
る。樹液が血のよう
に赤いから「赤血
木」と呼ばれる。家
畜のエサ箱の材料。

(アコギー)



アコウ

じょうりょくこう ぼく
常緑高木。ガジュ
マルとよく似る。
根が他の樹木に巻
きついて枯らすこ
ともある。果実が
枝に直接実る。

(ムーターギー)



イヌビワ

じょうりょくこう ぼく
落葉低木。黒くなっ
た果実は食べられ
るが虫もよくいる。
枝葉は家畜のエサ
にしていた。

みわ 実を割ってみよう！

実の中に花がある。こう
いう形の実はそれぞれ
に専属のコバチがいる。

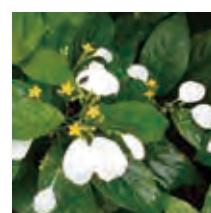


この花のうちに
花が咲いている

1.5 mm × 2
中に
オスが
いる

コバチは
別の花のうちの
オスと交尾、産卵。
その時にXスが
運んだ花粉で
受粉、花のうは
果のうに成る。

花のうのうち
の卵からふいした
Xスが花粉をつた
別の花のうへ。



コンロンカ

じょうりょくこう ぼく
常緑つる性木本。
花は小さな黄色い
星形。がくの1枚
が白く大きくな
り、花びらのよう
に見える。緑の中
で白が目立つ。

(トウスピヤギー)



シマヤマヒハツ

じょうりょくこう ぼく
常緑低木。果実は緑
から赤、紫、黒と変
わり、熟すと食べら
れる。酸味が強く果
肉は乾燥させて粉
にし香辛料として
使用。若葉は炒め物
にしたり、天ぷらに
食べられる。

(ツバサグース)



ヒハツモドキ

じょうりょくこう ぼく
常緑つる性木本。果
実は乾燥させて粉
にし香辛料として
使用。若葉は炒め物
にしたり、天ぷらに
食べられる。

(バンキギー)



ヤマグワ

じょうりょくこう ぼく
半落葉小高木。若葉
はヤギ汁や豚汁な
ど、肉料理に入れ
た。果実はそのまま
食べられる。

常緑つる性木本。
トゲのある枝で
他の木に絡んで
登る。果実はやや
えぐみもあるが、
食べる。



ツルグミ



マルバグミ

常緑低木。果実は食べら
れる。葉が大きいためオ
オバグミともいう。

葉を観察して
みよう!

うろこ状の毛
がたくさん生
えている。

常緑低木。グミ類によく
似る。祭祀のときに使う。

常緑半つる性木
本。葉の縁が波
うついて、裏側
は銀白色。果実は
食べられる。

リュウキュウ
ツルグミ

グミモドキ

サニム



ゲットウ(月桃)

常緑多年生草本。
茎を乾燥させて繩
を作った。独特の香
りが虫よけや殺菌、
薬草としても使わ
れる。



クマタケラン

常緑多年生草本。台
湾原産。ゲットウと
アオノクマタケラ
ンの雑種とされる。

リュウキュウ
ツチトリモチ

宮古島市保全種

多年生草本。クロヨ
ナ、オオバギなどの
根に寄生する。雄花
はネックレスのよ
うに雌花を囲む。

アオノ
クマタケラン

常緑多年生草本。在
来種。ゲットウに比
べ小型で花茎が直
立する。

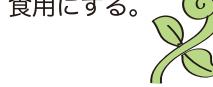
ガラサヌチビ
ヌグーフウサオキナワ
スズメウリ

つる性1年草。果実
は有毒。スイカのよ
うなしま模様が珍
しいため、観賞用と
して売られている。



ホウビカンジュ

常緑多年生シダ。
木の幹や岩壁に生
え、葉は垂れ下が
る。最近は新芽を
食用にする。



アマチャヅル

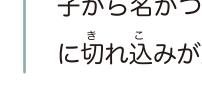
つる性多年草。5つ
の葉が特徴的。葉は
噛むと甘味がある。
お茶にして飲んだ。

ナガニウサ



ハブカズラ

常緑つる性木本。在
来種。木や岩壁にの
ぼる太い茎がハブ
のように見える様
子から名がつく。葉
に切れ込みが入る。



スバガマギー



タズナイ

リュウキュウ
ボタンヅル

常緑つる性木本。
祭祀に利用。火傷や
傷薬として利用。
刈り取っておいて
正月に家畜のエサ
にした。

半常緑つる性木本。
祭祀に使う。
刈り取っておいて
正月に家畜のエサ
にした。

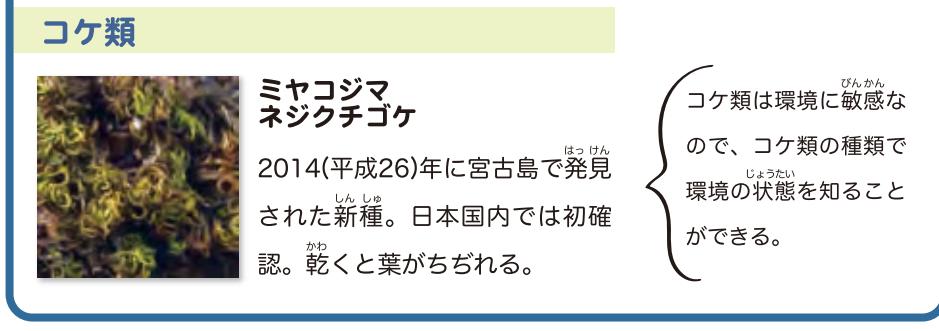
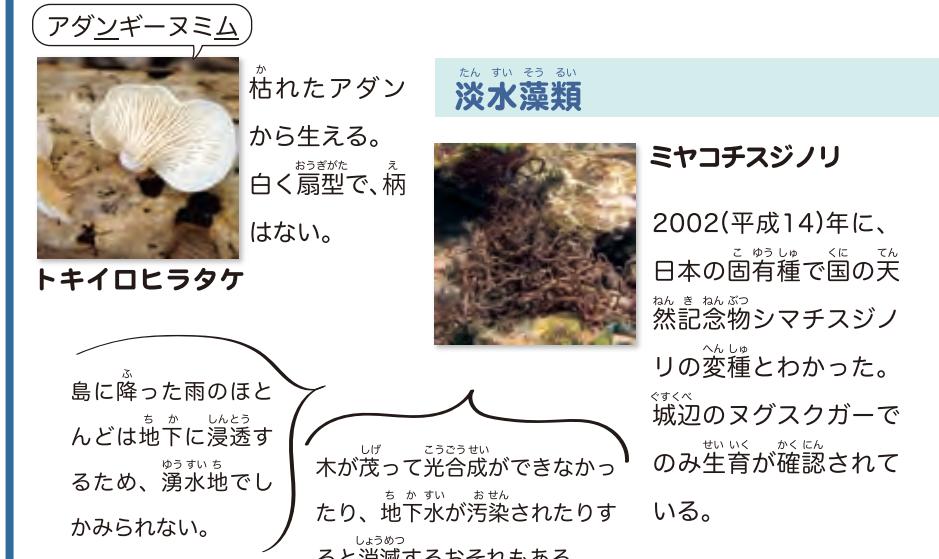
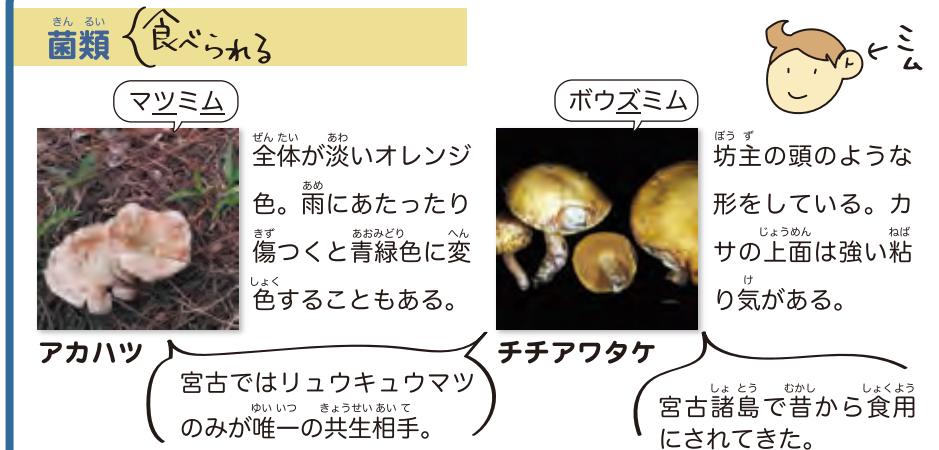
半つる性多年草。觀
葉植物。ハブカズラ
に似るが、葉に穴が
あく。



モンステラ

オウゴンカズラ
(ポトス)

常緑つる性木本。
觀葉植物が野生化
して大型化。白い模
様が入った、ハート
形の大きな葉をつ
ける。



県内最大の熱帯植物園

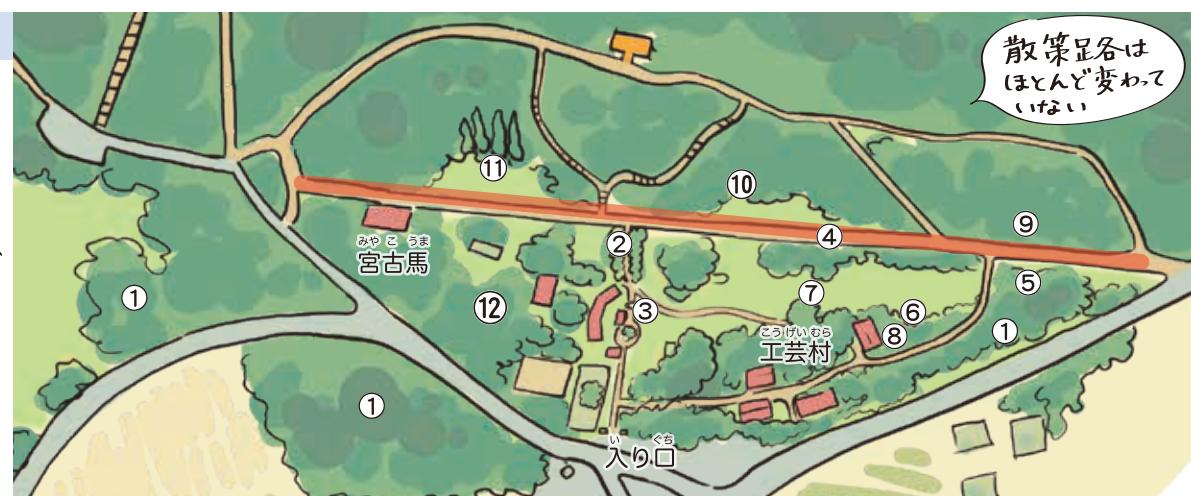
宮古島市熱帯植物園は、戦前までリュウキュウマツの林地で、琉球王府の時代から木材を切り出す山として管理されていました。しかし、廃藩置県後、管理する者がいなくなり、戦争中にリュウキュウマツが乱伐され、戦後はハゲ山同然に荒れた不良林地となってしまいました。

その後、1964(昭和39)年からナビフタヤマを中心とした12万平方メートルの林地を、自然教育や市民の憩いの場として造園が進められました。こうして1967(昭和42)年、平良市熱帯植物園が誕生しました。その後、2005(平成17)年に宮古島市熱帯植物園と改称し、2009(平成21)年に体験工芸村が開設されました。



いまの植物園

- ①マツ林
- ②フクギ並木
- ③イスノキ
- ④デイゴ並木
- ⑤ソテツ
- ⑥コバノナンヨウスギ
- ⑦パンノキ
- ⑧イジュ
- ⑨カンヒザクラ
- ⑩オオギバショウ
- ⑪シマナンヨウスギ
- ⑫ヤエヤマヤシ



森をまもる、「そで」と「マント」



山林を観察すると、山林と道の間には草や低木が生えています。これらの植物は林内へ侵入することもなく、また離れもせず、一定の位置関係を保っています。このような植物は、山林の土砂が流れ出るのを防ぐ大切な役目をしており、「そで群落」と呼ばれています。

また、山林の外側は低木やつる植物が茂っており、マントを羽織っているように見えることから、それらの植物群を「マント群落」と呼んでいます。

・強風や直射日光をやわらげる
・土が流れ出すのをふせぐ

ます。人間がマントを着て寒さから身を守るように、山林の中に直接風が吹き込んだり、日光が直射して乾燥するのを防いでいます。

一見荒れた印象を与えるため、森の邪魔者と思われて刈り払われたり、工事などで山林の周辺をえぐり取ったりすることがあります、その結果、山林内の環境が変わり、山林が後退して荒っていくことになるため、むやみに刈り払わないよう注意が必要です。

厳しく管理された杣山

杣山：琉球王府の山奉行が監督し、間切・村(島)が管理する山

宮古の南北方向には数少ない山林のラインがいく筋かのびています。山林は昔から生活に必要な木材や薪、食べ物を調達する場であり、限られた資源のため、琉球王府から厳しく管理されていました。詳細なマニュアルや厳重なルールを定めた造林も盛んに行われ、1700～1800年代にかけて、マツなどの建築資材のほか、農作物の塩害対策のためのアダン、凶作時の食用として

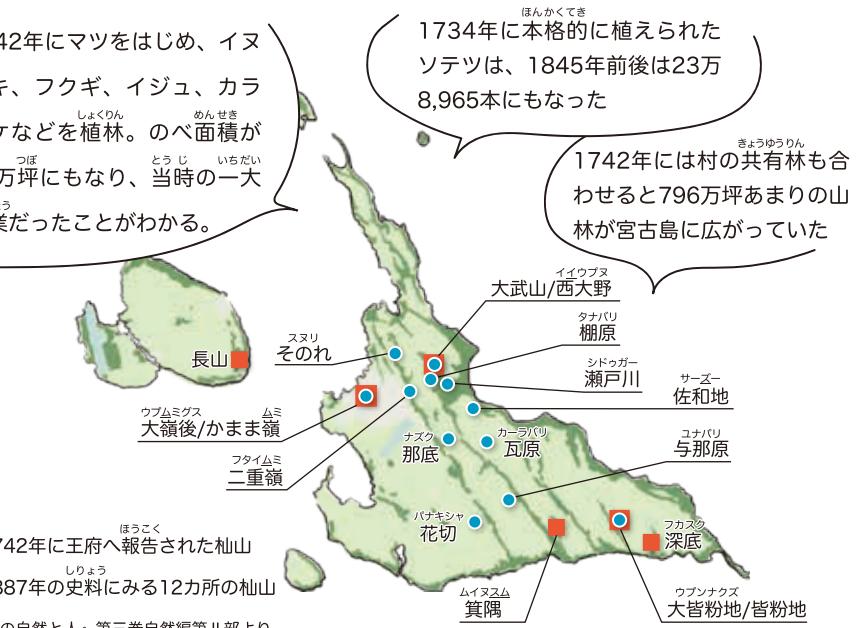
のソテツなどが植えされました。

1879年の廃藩置県後、管理の手が離れた杣山は、盗伐乱伐の対象となり、急速に衰退していきました。現在では牧山と大野山林でその一部を見ることができますが、開発による伐採は続いている。50年、100年先も緑豊かな宮古の環境を残していくために、これらの山林を守っていくことも重要な課題となっています。

1742年にマツをはじめ、イヌマキ、フクギ、イジュ、カラタケなどを植林。の面積が72万坪にもなり、当時の一大事業だったことがわかる。

1734年に本格的に植えられたソテツは、1845年前後は23万8,965本にもなった

1742年には村の共有林も合わせると796万坪あまりの山林が宮古島に広がっていた



■ 1742年に王府へ報告された杣山

● 1887年の史料にみる12カ所の杣山

『宮古の自然と人』第三巻自然編第II部より

まき やま こうえん い ら ぶ じま ひがしがわ
牧山公園は伊良部島の東側の

だん がいじょう い ち かたち
断崖上に位置し、サシバの形を

した展望台からは、宮古島と池

間島、来間島、各島をつなぐ3

おお はし いち ばう
つの大橋を一望できます。宮古

諸島の形や位置関係がよくわかる

り、植物の環境が観察できる場

所でもあります。

セヤーズ御獄は
この地域で
とても大セリにされ
いる御獄。



基本的に
神役がいいと入れない。
入る前と出る時にあ拜りをし
神役が最初に入りて最後
に出る。



御嶽は、集落の人にとって大事な祈りの場
で、むやみに立ち入ることや許可なく伐採す
ることが禁じられています。その結果、自然
林に近い植生が残されています。

うたきりん
御嶽林



祭祀と植物



宮古では昔から各集落ごとに祭祀が行われてきました。多い地域では年間に50を超える祭祀が行われ、五穀豊穣、無病息災、航海安全など、暮らしと深く結びついています。そういう祭祀にも植物が使われており、各集落ごとに少しずつ違いがあります。



マータ

3本のススキを三叉に束ね、たねまきの終わった煙の中央に立てて豊作を祈る。



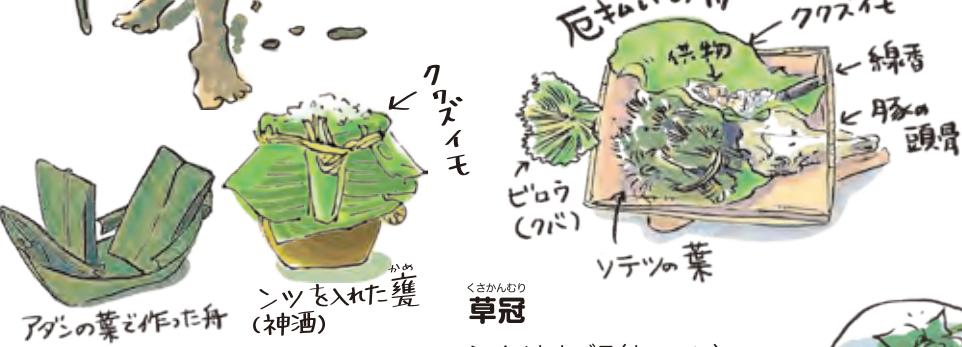
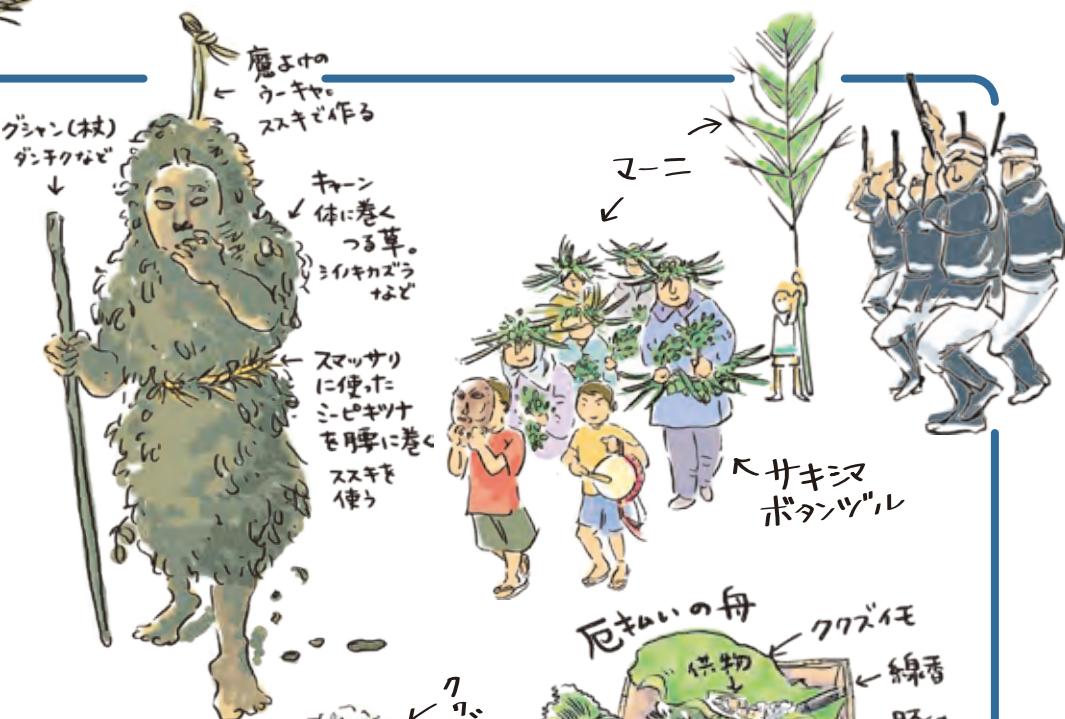
バラザン、サン(藁算)

藁算は、稻藁やイグサなどを結んで、数の記録や計算機として使った沖縄独自の民具。宮古ではススキを使った。農民や庶民を中心に県内各地で使われていた。現在は宮古や八重山、一部の沖縄島で稀に祭祀に使われる。



スマフサリ、スマッサリ

集落から厄を祓う行事のこと。集落の各方位の出入口にススキなどで編んだ縄に豚の骨をぶら下げ、結界のように張る。



杖

リュウキュウガキ・クロツグ・ダンチクなど

腰帯

トウツルモドキ・クロツグ・ススキ・サキシマボタンヅルなど



手草

ヤブニッケイ・グミモドキ・ダンチク・シマヤマヒハツ・ク

草冠

シノキカズラ(ヤーン)・カラスキバサンキライ・グンバイヒルガオ・クロツグ・サキシマボタンヅル・リュウキュウボタンヅルなど

